

想いを 千年後にも



半井 小絵

なからい さえ
気象予報士・フリーキャスター

I. 災害の現場

ゆっくりとした速度で北上する台風。平成23年の台風12号は大型で動きが遅かったため、台風周辺の非常に暖かく湿った空気を長い時間にわたり日本列島に送り込みました(図-1 気象庁HP)。紀伊半島の南東側斜面は進路の東側に位置し、東よりの暖かく湿った空気が流れ込み続けたために記録的な豪雨となり、期間中の降水量は多いところで1800ミリを超えました。1年で降る雨の6割強の量が数日間で一気に降ったことになります。台風の中心が岡山県に再上陸した時刻にも、紀伊半島では台風が離れていきつつあったにもかかわらず発達した雨雲がかかり続けていました。レーダーで雨雲の様子を確認しながら、私は「早く雨が止んで欲しい!」と祈るこ

としかできませんでした。

写真-1は、平成23年の台風12号による豪雨によって、土砂災害が発生した三重県紀宝町の明和小学校の校舎です。土砂等が校舎の1階に流れ込みました。災害から約一年半(平成25年1月下旬、半井撮影)が経過し、さらなる斜面の崩壊を防ぐために工事が進められていましたが、校舎は1階が土砂に埋もれたまま残されていました。

当時、校舎に避難していた男性の方に聞いたところ、「1階の教室は男性、2階は女性と別れて大雨の状況を見守っていた。この場所は大丈夫だろうと横になって寝ころんでいると、教室の中に川から溢れた水が浸水してきたので慌てて男性も2階にあがった。その直後に土砂が校舎に流れ込んできた」ということでした。もし、校舎に浸水していなかったら1階にいた方々は土砂に巻き込まれていたかもしれません。校舎にいたみなさんは2階の窓から外に出て、近くのお寺に再び避難したそうです。まさにギリギリのところまで命が助かったのです。

また、別の方からはこんなお話も伺いました。「祖父が生前、普段とは違う大雨が降ったときにはお風呂場に逃げるようにと話していた。あの日は危険を感じてお風呂場にいると、自宅の裏山が崩れてきて、隅にあるお風呂場以外、1階は土砂に埋まってしまった。祖父の言葉を覚えていたから助かった」ということでした。先人からの教訓を生かして命が救われた事例です。

II. 教訓を生かす

東 日本大震災の被災地でも、過去の津波の後「ここより下

図-1 平成23年台風12号進路(気象庁HP)





写真-1



写真-2

に家を建てるな」という石碑が建てられ、その教えを守って津波の被害に遭わなかった地区がありました。そのため震災後、各地に石碑などが建立されています。

宮城県気仙沼市の波路上、杉の下高台には「絆～あなたを忘れない」という言葉が刻まれた慰霊碑が昨年建てられました(写真-2半井撮影)。小高い丘になっていて避難場所に指定されていた場所です。そこに津波を気にしていた海の方角とは逆の後ろ側の海から、高台の高さを超える約17メートルの津波が襲ってきました。

「大地が揺れたらすぐ逃げろ、より遠くへ……より高台へ……」

この教訓と犠牲になった93人のお名前が慰霊碑に刻み込まれています。

以前、気仙沼にある小学校の校長先生から伺った話が忘れられません。この小学校では、午前中に帰宅していた1年生3名と地震のあと学校にお迎えに来た家族とともに帰宅した3名の児童が亡くなりました。「児童が亡くなってしまったことが非常に無念である。二度と同じような悲劇を繰り返したくない。校庭に6体のお地藏さんを安置したい」と言われていました。今後、この小学校で学ぶ児童は、校庭にあるお地藏さんを身近にみて、津波の恐ろしさ

と避難の大切さを学んでほしいということでした。

Ⅲ. 想いを教訓にのせて

災害の被害に遭った方々や災害で大切な人を失った方々は、ずっとその出来事を忘れることはできないでしょう。しかし、孫の世代よりさらに先の世代、200年後、千年後には、これらの教訓が伝えられていくのでしょうか。たとえば、書物に自然災害の被害の内容とともに教訓が書かれている場合、時代を経っていくと、単に歴史の教科書を読んでいるように、ただ文字をなぞるだけで、過去に実際にあったことであり自分にも再び起こる恐れがあるかもしれないと、考えることができなくなってしまう時が来るのではないかと懸念しています。石碑についても同じです。その場所にあるのが当たり前となって、日常生活の中で忘れ去られてしまう時がくるかもしれません。

私は何度も祖母から室戸台風の被害の話を聴きました。私の祖母は小学5年生の頃に京都で室戸台風の直撃に遭い、倒壊した校舎の下敷きになりました。屋根の梁の間にはさまってなんとか助かりましたが、友人21名を亡くしました。私は祖母との日常の会話の中で生活の一部とし

て、自然災害の恐ろしさを学びました。そして気象予報士の仕事をするなかで、伝えていくことができたと思っています。

大切な人や家財を自然災害で失いたくないという想いが込められて、人から人へと伝わることで初めて教訓が生かされるのではないのでしょうか。台風、地震、津波など日本列島は自然災害の多い国です。これまで幾度となく、自然の恐ろしさを経験してきました。この悲劇を繰り返さないために「想い」とともに「教訓」が伝えられていくことを願っています。



イラスト：仲野順子